

沙弥島採取のナイフ形石器について

小野 秀幸

表題の資料については、平成18年8月10日、沙弥島へ赴いた渡部明夫氏により採取された後、筆者の下へもたらされたものである。筆者は同島から出土した旧石器についてあまり類例を知らなかつたことと、渡部氏から資料紹介を行うよう勧められたことから、今回、表題の資料を紹介するにいたつたものである。



第1図 沙弥島の代表遺跡と遺物の採集位置（坂出市教委 1998を参考に作成）

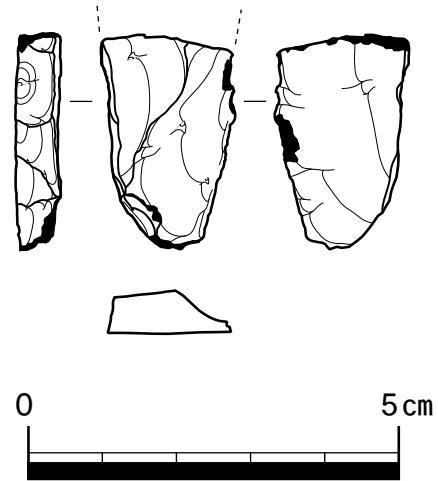
備讃瀬戸の島嶼部は、かつて先学諸氏による踏査及び瀬戸大橋架橋に伴う埋蔵文化財発掘調査によって旧石器時代の遺物が出土することが知られている（川畠 1959ほか）。特に顕著なのは羽佐島遺跡（渡部 1984・小西 1984）や西方遺跡（藤好 1985）、大浦遺跡（藤好 1984）・花見山遺跡（西村 1989）といった遺跡で見つかった膨大な資料である。これらの遺跡は、現在島の頂部に位置するが、往時は連綿と続く丘陵の頂部であったことが推定されている。今回資料が採取された沙弥島もそのひとつで、四国本島に最も近く、縄文海進以降、島と化していたものの、現在は昭和42年に実施された埋め立てに伴い、再び四国本島と地続きとなっている。この沙弥島は大きく3つの丘陵が認められるが、そのいずれにおいても石器が散布していることが知られている（坂出市教委1998）。しかし、旧石器時代のものと考えられる遺物の採取はあったものの、ナイフ形石器や角錐状石器といった定型石器は確認されていなかった（1）。

今回資料が採取された位置を第1図に▲で示した。川畠氏により石器が採取されたとされた城山および新地山に挟まれた鞍部の南斜面で、ちょうど8の「縄文遺物ほか散布地」として知られている地点の直ぐそばの、白石古墳へと上がる遊歩道沿いである。なお、この鞍部から北へ下ると弥生～古墳時代にかけての製塩遺跡である沙弥島ナカンダ浜遺跡となる（2）。

さて、採取資料は第2図に示した一側縁加工のナイフ形石器である。法量は、現存長29.5mm、最大幅19mm、最大厚0.65mmを測る。石材はサヌカイトである。石理に並行する風化面は灰青色を呈するほか、やや顕著な気泡状を呈する。上半分を欠損するほか、他の部分も若干欠損が認められる。欠損部の色調は黒色で、風化面に見られるような気泡は認められない。

形状については、完形でないことからはつきりしないが、図下半がやや丸みを帯びており、先端として作り出しているようには見えないので基部として理解した。素材剥片については主要剥離面がかなりフラットであり、図下端左側の剥離面端部でわずかに反りが認められる状況から横長剥片と考える。背面は先行する2枚の剥離面からなるが、これらのうち、背面左側縁部に位置する先行剥離面は、主要剥離面と同一方向である打面側から剥がされているのに対し、右側縁に位置する後出の剥離面は、打面とは反対の方向から剥がされている。このことから、用意された素材は教科書的な瀬戸内技法によるものではなく、板状の石核の表裏を打面とした交互剥離によるもの、あるいは塊状の石核から打面転移を伴いながら剥がされたものなどの可能性がある。背面左側縁に位置する剥離面と主要剥離面は共にかなりフラットで、かつ、互いにほぼ並行していることから、かなり石理の強い石材であることが想定できる。また、この背面右側縁部の剥離面は石理に引っかかりステップしているが、素材剥片を剥離した際、このステップした部分を取り込んでしまったため、刃部が明確なエッジをなしていない。本資料の素材の石核からは本資料と同じ方向に打面が設定された場合、表裏がほぼ並行するような板状の素材を得ることが出来るが、対辺側に打面を設定した結果、加熱による力が石理を斜めに横切り、うまく力が抜けなかった可能性が考えられる。

調整加工については、背部加工が左側縁部にほぼ直角に近い角度で施される。現状で5枚の剥離面を認める。調整の順番は、第2図で見ると側面図の下から2枚目の剥離面が最も古く、次いで1枚目及び



第2図 採集されたナイフ形石器（1/1）

3枚目と続く。したがって、1枚目と2枚目が逆転するものの、概ね基部側から先端側へと背部加工が施されたものと判断できる。

以上、採集資料について概観してきたが、ここで簡単にまとめておきたい。欠損品である本例からは読み取れる情報が限定され、当初、ナイフ形石器に分類するのを躊躇した。採集された地点が縄文期のものを含む遺物散布地であることから、縄文時代のスクレイパーの可能性をも検討する必要があった(3)。しかしながら、素材剥片の端部に二次加工を施して刃部を作り出すのではなく、素材剥片の打面側に背部加工を施してエッジを活かしていることから、ナイフ形石器に分類しても問題無いと判断した。しかし、素材の用い方から見た場合、羽佐島遺跡や西方遺跡などから出土したナイフ形石器には上記のような素材の使用方法は目立たないことから、当該器種に分類するに当たり、なお検討の余地があるかも知れない。

今回、準備不足のため単純に資料を紹介するにとどまり、深く議論を進めることができなかつた。機会を改め、川畑氏収集資料をも含めて本資料の性格を再度検討したい。最後になりましたが、資料紹介の機会を与えていただきました渡部明夫氏に深く感謝いたします。

註

1 川畑氏によると「島の北西にある城山で多く採集出来るが、新地山などにもサヌカイト片を大きく打缺いたポイント様石器が拾われている」が、城山採集のものは「ブレイドが多くほど正三角形に成形された石器や、腎臓形の刃形石器などがあ」り、「三角錐の尖頭器や、ナイフブレイドなどは未だ見当たらない」状況を述べている(川畑 1959)。ただし、本稿執筆中に氏の収集資料を実見させていただいた際に、ナイフ形石器および角錐状石器が採集されているのを確認した。

2 このほかに縄文時代後期の土器が多数出土することが川畑氏により指摘されている(川畑 1959)ほか、坂出市教育委員会の調査でも当該期の遺物が検出されており、縄文時代の遺跡でもあることがわかっている。

3 川畑氏の収集資料中には、縄文期のものと想定できるスクレイパー類が比較的目立つ。註1で触れた「腎臓形の刃形石器」等は石核転用した大型のスクレイパーであろう。川畑氏前掲論文を読んだ当初、今回紹介した資料についても当該期のスクレイパーの可能性が高いと想定していた。

引用・参考文献

- 川畑 迪 1959 「国分台無土器文化石器 附 坂出附近の無土器文化様石器」
『文化財協会報』特別号第4集
- 渡部明夫 1984 『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 I 羽佐島遺跡 (I)』
- 藤好史郎 1984 『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 II 大浦遺跡』
- 小西正行 1984 『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 III 羽佐島遺跡 (II)』
- 藤好史郎 1985 『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 V 西方遺跡』
- 西村尋文他 1989 『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 VI 花見山遺跡』
- 坂出市教育委員会 1998 「平成9年度国庫補助事業報告書 沙弥島千人塚遺跡」
『坂出市内遺跡発掘調査報告書』
- 坂出市教育委員会 2005 「平成16年度国庫補助事業報告書 沙弥ナカンド浜遺跡 讃岐国府跡 史跡城山」
『坂出市内遺跡発掘調査報告書』